京都大学新聞
学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都 (771) 8111 学内 2441
振替・京都33090
(1部 20円)

加茂川の畔
新入生歓迎コンパに
ご相談承ります
新館 旅館 清州
きよす
(本館)
河原今出川電停前
TEL (231) 1750・8776
(新館)
寺町通今出川上ル
TEL (231) 5121・5122

6.23闘争　闘う力を総結集

七〇年代階級闘争の橋頭堡

全国全共闘　六月闘争　大衆的昂揚でうちぬく

明治公園に五万七千名

六月反安保闘争は、政府ブルジョアジーの国会開催を回避した「無風化」攻勢の中で、ますます展望に乏しくされていた帝国主義諸政策に抗して、全国で圧倒的な大衆の決起による七〇年代初頭の階級的政治決戦として闘い抜かれた。殊に、明治公園では「全国全共闘連合」に五万七千名という空前の結集をみたが、これらのぼう大な階級的エネルギーが、「ファシズム」の登場を明確に見つめた闘争形態として結合し、プロレタリア統一戦線を現実的に構築していくことが迫られているならう。

明治公園をあふれ出る五万七千の学生、労働者、学生部隊のほとんどは、各大学の学部闘、クラス闘、あるいは、一人でやってくる部分の内容は、質量両面から「党派選」に結集した大衆の「全国全共闘」「連合の固定化」を突破していくという大きなエネルギーを孕んでいたといえよう。

23日、5万7千名を結集した労学集会（明治公園）

機動隊の厳重な包囲網の下、午後一時ごろから会場には、次々と学生、労働者がつめかけ、個別集会とデモ、突撃訓練をくり返した。組織的に参加したのは、日大一五〇〇、駒澤大の集会を経て東大一〇〇〇、明治大一〇〇〇、中大一〇〇〇、立教大七〇〇、専修大五〇〇、早稲田大二〇〇〇、法政大二〇〇〇などの全共闘部隊であるが、その他五十人規模の小部隊はほとんど無数に近く会場内に存在した。

党派別分けとして、まとまっていたのは、反戦の労働者、反戦高校生の高校生を大量に結集した中核派、白ヘル部隊が約四五〇〇、冨士公園の集会を経てデモで会場にはせた解放派（反帝学評、労評、高評）が五〇〇、実力闘争を貫徹しようとする解放戦線がML軍団として一〇〇、プロレトが一五〇、共産同戦旗派一〇〇、叛旗派五〇、学生インターナショナル一五〇などであり、他のほとんどの部分は、各大学に散って参加していた。

午後六時すぎから、全国全共闘書記局、全国反戦世話人による実行委主催のもとに「反保粉砕沖縄闘争勝利、日米共同声明粉砕、カンボジア軍事介入粉砕、6・23労学総決起集会」が行われた。

集会は、まず全国全共闘書記局代表が「六〇年代の闘いの全成果を踏え、七〇年代闘争を構築していくため、6・23闘争に決起せよ」というあいさつで開会を宣言、司会を神奈川県反戦、群馬県反戦の代表に委ねて行われた。

司会のあいさつ、三里塚芝山反対同盟青年行動隊長のアピールにつづき、学生団体八派からの表が「六〇年代の闘いの全成果を踏え、七〇年代闘争を構築していくため、6・23闘争に決起せよ」というあいさつで開会を宣言、司会を神奈川県反戦、群馬県反戦の代表に委ねて行われた。

司会のあいさつ、三里塚芝山反対同盟青年行動隊長のアピールにつづき、学生団体八派からの表が「六〇年代の闘いの全成果を踏え、七〇年代闘争を構築していくため、6・23闘争に決起せよ」というあいさつで開会を宣言、司会を神奈川県反戦、群馬県反戦の代表に委ねて行われた。

デモは、七時半に出発し、明治公園から青山三丁目・青山墓地南端・六本木・溜池・国会正面・霞ケ関・青山三丁目・青山墓地南端・六本木・溜池・国会正面を中心に、約五〇〇の先頭部がコースを青山通りとろうとして、機動隊と激突、投石、火炎ビンで攻撃した。しかし、付近の機動隊が交差点に集中し、さらに公園側に退いこむように規制したため、結局彼ら

デモは、七時半に出発し、明治公園から青山墓地南端・六本木・溜池・国会正面・霞ケ関・青山三丁目・青山墓地南端・六本木・溜池・国会正面を中心に、約五〇〇の先頭部がコースを青山通りとろうとして、機動隊と激突、投石、火炎ビンで攻撃した。しかし、付近の機動隊が交差点に集中し、さらに公園側に退いこむように規制したため、結局彼ら

出発直後、公園周辺では早所で警察の機動隊を粉砕、一部では渦巻デモのなかに三〇名の機動隊員を巻きこんだ。青山三丁目交差点では、フロントの部隊一五〇を中心に、約五〇〇の先頭部がコースを青山通りとろうとして、機動隊と激突、投石、火炎ビンで攻撃した。しかし、付近の機動隊が交差点に集中し、さらに公園側に退いこむように規制したため、結局彼ら

「デモ隊から石投げ」と宣言していたML軍団は、明治公園内で警備のスキをついて、鉄パイプ・火炎ビンを用意してきた。集会後、反戦委員長、反帝学評派は「六月闘争は、先進闘争を通じてみ、デモ隊列の中から三隊に分れて出発、八時半青山三丁目で二隊が機動隊の壁に突入を試み火炎ビン二〇本を投げ攻撃したが、激しい弾圧にあって散らされた。ML軍団に対する弾圧は、無法きわめ、九時すぎ青山墓地南端通過した際には、機動隊が隊列を急襲し、激しい暴行をくり返した。しかし、九時二十分ごろ、西麻布で既に伝令を受けたML軍団は、他の全共闘の学生を巻きこんで麻布署を正面から襲い、約三分間にわたり、付近を制圧した。さらに溜池付近で、ML派を検挙しようとした機動隊を猛烈にねばりあい、ガス弾の乱射に対し、投石で抵抗した。

ML派は、この日の「反戦闘争」で軍団のほとんどが不当逮捕され日比谷公園の総括集会には十名

全京都学生五千が決起

6・23 長期政治ストを貫徹

京大全学スト実を中心に

三日目、午後三時から京大本部時計台前で、安保粉砕、日米共同声明粉砕の全京都学生総決起集会が二千名の結集で開催された。京都においては、京大、同志社大、花園大の反安保全学長期政治ストをはじめ、各々の大学でスト体制が構築されていたが、二三日は、そのスト体制の最終局面を、全京都の学生の総決集で闘かおうというもので、七〇年大月以降の闘争の展望を切り開くものとして意義が見い出せるだろう。

集会は、百万辺グランドにおける府学連（民青系）の六千人規模の集会に対置した形で、時計台前で開催されたが、昨年の京大闘争の敗北以降、久々に全共闘派の学生が大衆的に結集、活気に満ちたものになった。

2000名を結集した6・23全京都学生総決起集会（京大）

集会では、八学園スト体制から全学学生大会で十三日から全学スト実施へ、さらに十四～十五日の闘争を東京において東大全共闘とともに闘った京大の部隊から、教養部六月闘争委、文学部闘争委が、「日本共産党・民青の安保乗という路線の批判を通じて、闘う部分の総結集を京大において闘い抜き、七〇年（代）闘争を真に闘う部隊の創出をはじつつある」旨のアピールを行なった。

同志社全学闘争委からは、「戦後日本の学生運動の歴史的総括、とりわけ、六七年十・八闘争以降の実力闘争を、六九年四・二八闘争に見られた権力の厳突破の困難性として総括し、今秋を目標に強固な闘争主体の形成をなさねばならない」旨のアッピールがあった。

その他、花園大、立命館大、京都一橋大、府立大、府立医大、などの大学が、アッピールを行なった。

昨年の全共闘運動が、官僚大学当局、一体のファッショ的弾圧の前に敗北を余儀なくされ、その後、京大、同大を除いて、その他の大学では大衆運動の構築が困難な状態にあったが、（六七年六月）を前に、各大学に自然発生的に大衆部六月闘争委は、一回生、二回生それぞれ二百名の隊列に別々に組織、戦闘デモを貫徹した。

円山公園では、日本共産党系の内日青共系が結集し、反戦派労働者学生百余名が結集して、安保粉砕、日米共同声明粉砕の集会が開かれた。

これは首都に総決集した中核派を除く、解放派系、共産同系共労党系の労働者と、ノンセクトの労働者、学生（京女大、竜谷大等）が結集した。

京都の労働戦線に於いては、二十三日までに三波の総ストを貫徹した全金畑鉄工労組などが有り、七〇年代の階級闘争を担う労働者反戦派の活動が注目される。

22日 全学スト貫徹へむけ 西部集会を阻止

六月二三日午後四時から時計台前において全学スト実の総決起集会が行なわれ、三日目を迎えた全学スト貫徹と、全学ストを認めず敵対している日共・民青の闘争後退策動を粉砕する事が大衆的に意志一致され、六時西部構内に場を移し集会を続けた。更に機動隊が完全に包囲する中で西部構内ピケットを貫徹し、日共の反革命的集会（全京都大安保廃棄宣言集会）を粉砕し、翌日の全京大・全京都学生総決起集会への結集を確認した。

四時から約四百名の学生を結集して開かれた時計台前総決起集会において、は教養部六月闘争委・文学部闘争委・工学部戦線・理学部共闘会議等各学部闘から当日の闘争を「翌日の全学スト体制＝全京都集会を保障するために西部構内引り込みを貫徹するものとして、更には六月闘争において完全な〝破産〟を大衆的に露呈しつつも三日集会を「新しい時代の幕あけ」として、おそりさわぎ、強行する中で、大衆の闘うエネルギーを議会主義的に囲い込み、自らと大民戦線派として形成し、革命派への戒厳令をひく、闘う部分の孤立を粉砕して、闘う部分の総結集を通じて、六時西部構内に場を移し集会を続けた。

また左翼、学部部自治会、今まで、の民青制圧下から、革命派の大衆運動が形成されつつある事の報告があり、更に医学部自治会からは、六月以降の闘争方針として「医療の帝国主義的再編の現実を、既入試粉砕闘争と共に闘い抜く」ことが提起された。

集会の後、学内デモから十一時半に民青系の全京都安保廃棄宣言集会の予定されていた西部構内（百万辺グラウンド）へ移った。そこで総決起集会を続けていた後、西部構内各人り口でのピケの配置になる。深夜になるに従って機動隊の包囲網が強化され、（動員千五百人・装甲車二十五台）、百万辺グラウンドは照光機で照射され、民青系学生が市役所から三人五人結集し、緊追態が増す中で、全学スト実の学生はピケを貫徹した。

一方では、大学当局からの強硬策動が進められ、十一時十五分に、百万辺グラウンドに届け出されている（民青系）集会を保障するために、集会のため外には百万辺グラウンドから退去するよう「退去要請」がだされ、機動隊の導入が予想される中で、スト実の学生は十一時半頃に西百のピケ貫徹と、西部構内から撤収移行、京大農学部の提起していた農員の二十九分ストの制約を乗り越えゼネラルストライキを実力貫徹した。

これより先に、二十二日には、午後一時より農学部第九講義室で、農学部全学部成員討論集会が約十名の結集で行なわれ、学生、院生、助手、助教授の間で昨年来の農学部闘争の過程でますます明確化された大学当局の犯罪性を糾弾し、今後の闘争方針の討論がなされた。

この後、学生約六十名は、四時から行われた時計台前、全京大学生総決起集会に参加し六義、再び農学部にもどり、五時から新館前で農学部全構成員総決起集会を約百二十名の結集で行なった。この集会にも、助手十数名、助教授三名、専務職員五名などの学部構成員が決起し、それぞれがこれまで戦闘的に闘ってきた院生生姿保行動委、農学部自治会常任委との連帯を表明。また、この日のデモの真髄で、二十三日のゼネストに向けての意思表明を行なった。集会には、教養部の農学部闘争委二十名も参加し、農学部闘争への連帯のアピールをこれい、ついて街頭デモに移ったが、教養部の学生は、この日西部グラウンドで強行されもうとした民青学生の集会を阻止するために、この学生には参加しなかった。デモは、六時に約百名で学生を西に農学部を出発。今出川通、河原町通、四条通のコースで集結に貫行され、円山公園での総結集では、再度、翌日のゼネスト貫徹が確認され、直ちに京大のピケに参加、約三十名が農学部に引り込んだ。

翌二十三日は、泊り込み部隊を中心に約五十名が、早朝から農学部の各出入り口をロッカー初などでバリケードを築いて、二十二日、大阪では西区靭公園において午後六時より社会党、総評系の反安保大阪府民集会が開催され、同時刻、同場所で大阪を中心とする各大学全共闘、反戦青年委（フロント系）、学連（金山委員長＝中核派）などが発言した。五地区反戦（共労党系）、中大反戦（解放派系）、南区反戦（共産同系）、東南反戦（共労党系）、東淀川反戦（共産同系）、東南反戦（解放派系）、などが発言した。五地区反戦は、「安保破棄」集会を開いた。これは、黄ヘルを着けた「防衛隊」が登場した。この集会のあと、円山労働者はデモを行し、野党の全京都集会に参加した。

反戦派労働者三百名も

六月二十三日、午後六時から、京都市内の春日公園で、反戦派労働者学生百余名が結集して、安保粉砕、日米共同声明粉砕の集会が開かれた。

これは首都に総決集した中核派を除く、解放派系、共産同系共労党系の労働者と、ノンセクトの労働者、学生（京女大、竜谷大等）が結集した。

京都の労働戦線に於いては、二十三日までに三波の総ストを貫徹した全金畑鉄工労組などが有り、七〇年代の階級闘争を担う労働者反戦派の活動が注目される。

農学部 6・23ゼネストを貫徹

22日 全構成員が集会デモ

二十三日、大阪では西区靭公園において午後六時より社会党、総評系の反安保大阪府民集会が開催され、同時刻、同場所で大阪を中心とする各大学全共闘、反戦青年委（フロント系）、学連（金山委員長＝中核派）などが発言した。五地区反戦（共労党系）中大反戦（解放派系）、南区反戦（共産同系）、東南反戦（解放派系）、東淀川反戦（共産同系）、東南反戦（共労党系）、などが発言した。五地区反戦は、「安保破棄」集会を開いた。これは、黄ヘルを着けた「防衛隊」が登場した。この集会のあと、円山労働者はデモを行し、野党の全京都集会に参加した。

大阪でも一万五千が決起

全共闘・反戦 総評系集会に介入

全京大集会、四時からの全京都集会に決起した。この農学部のゼネストは職員にとって強大な制約をこえて闘ってゆくべきだ。

沖縄 反安保、基地撤去闘争

22日 軍用道路を四万人がデモ

安保条約固定期限が切れる六月二十三日午後、沖縄では米軍基地密集地帯である本島中部の美里中学校の校庭で祖国復帰協議会主催の「安保廃棄、基地撤去要求県民決起集会」が開かれ、労働者・学生・高校生・市民約四一万人が参加した。大会後、嘉手納基地と石花弾薬庫（米ガス兵器が納入）沿いの軍用道路で デモが展開され、軍用道路が完全に デモで埋まり車用車を言わ一切の車が停止した。

大会では嘉屋武復帰協会長が「沖縄住民の生活は米軍基地によって毎日おびやかされている。安保条約は沖縄の米軍基地を核としたものであり、基地撤去の闘いがすなわち安保廃棄の闘いである」と挨拶、引き続いて日米両政府に向けて安保条約破棄と B52、毒ガス兵器即時撤去を要求する二つの決議がなされた。

この日の大会には、教員会、高教組が半日スト、官公労、全逓、自治労がそれぞれ三割～五割の参加をしたのであり、沖縄の労働者が、「復帰協のスローガンに従う」ことで参加し、三党委員長が大会で挨拶した。

デモは、嘉手納基地、知花基地沿いの軍用道路16号線約七キロを大衆的行進、ライフル銃で完全武装した米兵が警備につき、各ゲート付近の道路では琉球警察の四時間ストト、民放労組が半日ストを行なった。労組の他青年団体、婦人団体、高校生、学生の参加が集結した。デモは、嘉手納基地、知花基地沿いの軍用道路16号線約七キロを大衆的行進、ライフル銃で完全武装した米兵が警備につき、各ゲート付近の道路では琉球警察の機動隊が警備に当った。しかし軍用道路16号線沿の地域はデモ隊で完全に埋まり軍用車も完全に停止し基地機能の一部をマヒさせるという中で、学生部隊は火炎ビン数本を基地内へ投入むしろということを含め戦闘的に闘われた。

当日の沖縄における反安保闘争の大衆的行動は嘉手納ガス兵器廃棄の急を要し、女高性の闘争は、ガス基地の延期、女高性の闘争は、ガス基地の延期、女高性の闘争は、ガス基地の延期

社会党・総評の中央集会
反戦派が実力で演壇占拠
21日

日米安全保障条約の自動延長を二日後にひかえた六月二十一日、反安保全国実行委員会の主催により「日米安保条約廃棄、沖縄全面返還を要求する中央集会」が、代々木公園B地区に、総評、中立労連、新産別や社会党系の労働者を中心に約三万五千人を結集して開かれたが、解放派などの学生が介入し、演壇を占拠して「社会党の帝国主義社民への転化を許すな」と訴えた。主催者側は機動隊を導入し、解放派を排除するとともに、宣伝カーを利用して集会を二分間でうちきり、新橋コース、「新宿コース、原宿駅コースの三コースにわかれてデモ行進を行ない、いずれも三時ごろに解散した。

この日、集会は午前十一時から予定されていたが、解放派の労働者、反帝学評や黒ヘルメットの反戦青年委員会の労働者などは九時ごろから会場に集まりはじめ演壇の向かって左側で集会を開いた。九時四十五分ごろ、この集会は約六百名にふくれあがり、演壇上のうち三名の反帝学評の旗手を主催者が実力で排除しようとしたさきっかけに、解放派の労働者、学生約一百名で演壇上を占拠し、この集会では、革命的労働者協会、全学連（行進委員長）中央執行委員会、東大全学闘などからの、社会党の帝国主義社民への転化を許すな」に反戦を国会、官庁街へ向けて、六月安保決戦の三日目、二十三日夜八時、渋谷宮下公園へ結集するよう呼びかけられた。

十時半、退去要求を行なった主催者側は、十一時二十五分、ついに岩木総評事務局長が「秩序機動隊を導入、十分後には演壇上の労働者、学生を排除した。なお、この集会に、京大学評の隊列は赤旗見附において、日比谷公園での総評集会を余儀なくされたが、解放派系の労働者は、一度はコースを変ったものの、激しい抗議により、機動隊長に規制の中止を余儀なくさせた。解散後、新橋の解放派系労働者は日比谷公園公園公会堂前に向かい学生と合同で総括集会を行なった。

京大病院
看護婦二名が無期スト
強制配転に反対して

二十三日午前零時より、「強制配転制度白紙撤回／新規移転阻止／看護婦（師）の本来の職務に専念／安保粉砕・日米共同声明粉砕総粉砕」のスローガンのもとに、京大病院外科第Ⅱ講座の看護婦三名が無期限ストライキに突入した。

このストライキは、京大病院における看護婦の勤務交代（所属する診療科の交代）をめぐり、この勤務交代を、強制配置転換へむけた制度の確立であり、そ

管理支配強制の強化としてもあるとする。すなわち現在の医療体制が、大部分に安い労働力再生産機構としての基礎認識を、働けぬ者を社会的に隔離し、収容する精神病院、診療所（第二種病院）という医療の二重構造を生み出し、その中で患者を差別し、また医療労働者についても多くの身分差別を設け、物言わぬ労働者を作ってゆく方向でか七年代医療危機を乗り越えようとする意志一致して」。

6・23
医学部全構成員が決起
新病棟移転阻止に向けて

六月二十三日、京大病院前コンコースにおいて、医学部全構成員総決起集会が学生、病院労働者など百数十人の結集をもって開かれた。

この集会は、京大病院政治ストライキ実行委員会、文学部教職員会、工学部職員会、文学部教職員会、工学部職員会など百人あまりを結集して行なわれた。

この集会は、全学ストライキを軸に闘いぬいた六月闘争の総括討論集会による、「六月安保粉砕総闘争」、「六月安保闘争の総括」、「学部職員会、文学部教職員会、工学部職員会」、「学部職員会」、「学部職員会」、「

『インドシナ人民支援』の犯罪性

―日本共産党批判

津田道夫

去る十七日、全学ストライキ中の京大本部構内において、京大新聞社主催のシンポジウム「アジアの革命と日本」が開催された。この日は民青学生のスト破壊がくわだてられており、朝から緊張関係がつづく中で、講師に津田道夫氏をむかえたこのシンポジウムは二時間にわたって行なわれた。

氏は、インドシナ情勢の分析を「既に、インドシナ三国というカテゴリーは政治的に崩壊している」という視点から綿密に行なわれ、「ベトナム戦争のベトナム化」政策のために、アメリカ帝国主義のラオス、カンボジア侵攻があったことを説明した後、それにともなった日本帝国主義の反革命進出の意図を具体的に明らかにされた。

さらに、「朝中共同声明」に対して、これを帝国主義勢力に対する反撃として高く評価し、日本共産党のこれに対する誤った評価を批判するとともに、日本共産党の今回の大会「決議案」にみられる「プロレタリア国際主義」と「人民革命の思想」の欠落の犯罪性に関して言及された。

六月闘争以前に、はやはやと、異例の大会「決議案」を発表し、同時に発表された「提起」にもみられるように、ますます、小アルジョア党へと自らを純化しつつあるこの党に対して、われわれは、あらゆる分野にわたって本格的な思想闘争を展開しなければならないなろう。

ここに、シンポジウムの中から津田道夫氏の「日共批判」の部分を、氏の了解を得て、掲載することにする。

（編集部）

今回の佐藤内閣の、アメリカのカンボジア侵略を支持するという決定は、今日のインドシナ情勢の分析を「既に、インドシナ三国というカテゴリーの、主流的見解を否定する、帝国主義的意図にもとづく政策に貫かれているとみなければならない」と考えます。だからこそ、佐藤一味は、アメリカの政府部内からさえ非難のあがっている、今度の事態に、積極的支持を表明したわけです。

この点の暴露を意って、共産党の不破議員がいうように、この佐藤一味の政治選択を、「対米従属」という側面からだけ攻撃するのでは、これは、復活した日本帝国主義の独自の役割を、おおいなる論理にも導きかねない。つまり、この不破議員の論理は、日本帝国主義強化の論理であると、あえて言うことができると思います。

で、インドシナ革命戦争の強大な後衛をもって任じている中華人民共和国は、この佐藤一味の挑戦に対して、きっぱりとの独自の帝国主義的役割を直ちに糾弾している。それから朝鮮人民民主主義共和国の主張も同じようなものであったわけです。

ふりかえってみますならば、これより先、四月九日に中華人民共和国の首相である周恩来が、朝鮮民主主義人民共和国首相の金日成に招かれて、平壌を訪問して、「朝中共同声明」というものを発表しております。この「朝中共同声明」というのが、「佐藤・ニクソン共同声明」に対抗した、国際プロレタリアートの断固たる意志表示であるということは、言うまでもないかもしれませんが、この中で、特に、「日本の軍国主義がすでに現実のものとなっている。アメリカ帝国主義と結ぶものは日本帝国主義であり、日本軍国主義と闘わなければならない」という、これは、考えようによっては、非常に挑発的な言い方ではないかと思います。つまり、逆に、インドシナ人民の闘いというものが、日本のプロレタリアートに対する強力な援助になっているということを示唆表明している。

ところが、先ほどって発表された日本共産党の第十一回大会決議案なる文章を見てみますと、ここにはいろいろな誤りがありますけれども、プロレタリア国際主義の観点から見るならば、ひとつの決定的なモメントを踏み出は発見されたでありましょう。

つまり、「インドシナにおける革命情勢は非常に緊迫している。インドシナに対する革命闘争が困難になっている。だからインドシナ人民の闘いに対する連帯と支持を強めなくてはいけない」ということを、「決議案」ではいっております。ほとんど修正なく、満場一致で採択されると思いますが、「決議」といってはいえませんが、「連帯と支持を強めなければならない」という、これは、考えようによっては、非常に挑発的な言い方ではないかと思います。つまり、逆に、インドシナ人民の闘いというものが、日本のプロレタリアートに対する強力な援助になっているということを示唆表明している。

われわれが、これと具体的に結びつくことができるんですね。

共産党の綱領的政策においては、外交政策と国内政策を機械的に切り離して、外交政策において抽象的なことばの上で、「支持と連帯」をうたい、国内政策においては、昨年の十二月の選挙において、ためしてみられたような、いわゆる「政策提起主義」――国内政策においては、日本帝国主義ブルジョアジーならびにその執行機力の、具体的な犯罪、具体的な悪徳を暴露するのでなくて、労働者階級の階級意識が解体されたところで、「有権者大衆」の、大衆エゴイズムというものを取捉操作するというかたちで、この「政策提起主義」がでてきた。

つまり、佐藤一味が、その独自の路線を歩み出した、まさにその時、国際プロレタリアートの側からは、そういう意志表示がなされていない。そして、たとえば、一番けっさくなのは、四国の本州に、三本ばかり橋をかけるんだ、というですが、この橋の安全性について、日本共産党の政策を提起してみるとか、つまり、佐藤政府がやっている四国架橋政策というのは、地元の利害を無視しているし、橋は、大独占の利害を優先させて、十分な論拠が示されていないから、これに対して、日本共産党の四国架橋政策を対置するとか、あるいは、静岡でミカンが腐って農民たちが困るから、日本共産党の「ミカン政策」を対置するとか、そのような政策を作るというかたちで、「老人対策」とかいうものと、他、「政策提起主義」がならべられている。そして、たとえば、一番けっさくなのは、四国の本州に、三本ばかり橋をかけるんだ、ということですが、この橋の安全性について、日本共産党の政策を提起してみるとか、つまり、佐藤政府がやっている四国架橋政策というのは、地元の利害を無視しているし、橋は、大独占の利害を優先させて、十分な論拠が示されていないから、これに対して、日本共産党の四国架橋政策を対置するとか、あるいは、静岡でミカンが腐って農民たちが困るから、日本共産党の「ミカン政策」を対置するとか、そのような政策を作るというかたちで、「老人対策」とかいうものと、他、「政策提起主義」がならべられている。

佐藤は、対外政策ないし軍事政策においては、次と政治的、軍事的メリットを確立してきているわけで、これと対内政策を大衆の目には、切り離して提示している。そして、「内政の七〇年代」というようなことを言っているわけです。

だから、日本の帝国主義、軍国主義が復活したというでも、これは戦前の、ブルジョアの帝国主義